釣れ釣れなるままに

２０１６年思い出の釣行記 PART.　１１

帰ってきたウルトラマン

鹿島釣狂

【岩見沢釣遊会第７回大会】

岩見沢釣遊会の今年最後となる第７回大会が１１月１３日、春立港～浦河港で開催された。今のところ、僅差で私が年間優勝候補のトップに立っている。しかし、本日の成績次第では逆転の可能性を秘めているので気を抜かないで最後まで奮闘したい。

前日まで時化続きで、岩見沢でも雪が降り積もる天気だったが、当日は波が１．５ｍ、風も穏やかで、気温も零下を下回ることはなくこの時期としては絶好の釣り日和となった。私の釣り場は、初めての入釣場所になるが、最近大物の便りが届いている浜荻伏とした。なんでも近年タカノハの大物も出ているようだ。浜荻伏には、前野、嵐、谷口氏と共に下りることになった。前野氏とは年間優勝を争っているが、同じ土俵で戦うこともよいだろう。３人の後を付いていくと、前野氏、嵐氏、谷口氏の順に、それぞれが狙いを定めた場所に下り立っていった。浜荻伏は浅い大きな岩盤が１００ｍ程も沖にのびているが、私は、事前にグーグルマップで溝らしきところを２カ所確かめておいた。その第一の候補としていたところに荷物を置いた。波の具合を見ながら溝らしき所に向かって３本の竿を、ゴロ２本ネット仕掛で近投、ゴロ１本ネット仕掛で中投、２本バリ仕掛けで遠投した。ハゴトコのアタリが続く中、ガクンとしたアタリが出て４０㎝弱のカジカが上がり２魚種５匹の規定の魚は早々に揃えた。しかし、その後は小カジカばかりで大物の雰囲気は漂ってこない。

第２の狙いとしていた所へ空身で様子を見に行くと周辺には誰も居らず、実際の海況も予想していたものと変わらずいい雰囲気である。釣り場を移動することにして、荷物を取りに戻った。そして、第２とした釣り場に移動してみるとその隣りに前野氏が入っていた。彼はカジカを２本上げたが嫁が獲れず、アブラコを求めて移動してきたらしい。彼の左側に竿をセットする。すぐによいアタリが出て、抜きあげた魚はドンコだった。その後はド

ンコばかりが釣れてくる。先ほどの場所はドンコが１匹も釣れなかったのにどうしたことだろう。

電池切れでヘッドランプの明かりが薄暗くなってきた頃、廻りの景色が鮮明になり出してその明かりも必要としなくなった。ドンコもどこかへ去ってしまったのかアタリも途絶えてしまった。そんな時、ガクンと竿尻が持ち上がり４０㎝弱のカジカが釣れた。これで２本目だ。いまだ大きさでは前野氏の魚に負けている。

ゴロやコマセを使い果たしたので３本の竿を１本バリ、２本バリ、フロートのついたタカノハ仕掛で遠投にした。その遠投したタカノハ仕掛の竿によいアタリが出た。しかし、気になっていた途中にある高根に潜られてしまって、その魚は３０分待っても出てくることがなかった。

また、また大きなアタリだ。慎重にしかも途中の高根に潜られないようにとリールを巻いた。今度は、なんとか手前まで寄せることが出来た。波打ち際では更に慎重に竿を操作しながら寄せ波と共に魚を取り込んだ。５０㎝程のアブラコだった。ハリが口先の皮１枚に繋がっていた。強引に取り込んでいたら取り逃がしていただろうと思えるようなものだった。これで成績は前野氏の上をいっただろう。

休憩していたはずの前野氏の動きが慌ただしくなってきた。そして、なにやら腰を溜めて竿を大きく撓(しな)らせている。釣り上げたのは私と同じようなアブラコだった。カジカは私のものより大きいので、成績では抜かされてしまっただろう。年間を争っている彼になんとか追いつこうと最後まで諦めないで打ち続けたが、天は私に微笑まなかった。

休憩していたはずの前野氏だったが・・・

あれあれ、アブラコを釣り上げてしまったぞ　　どうだ、これでお前の上をいったな

さて、今回の釣りで、様々な意味の「間」というものに出会ったような気がする。古い話になるのだが、１９９７年の「セリーグ、日本シリーズ・ＭＶＰ」に輝いたヤクルトの古田敦也捕手は、前評判の高い巨人やオリックスを倒して見事日本一へ導いた立役者である。眼鏡を掛けた捕手は一流になれないと言われた中で、野村監督に見いだされて何度も盗塁阻止率１位を獲得し、打者としても超一流のプレイヤーとなっていった。何よりすごいのは、相手バッターとの「間」を操るその才能に長けていたことだ。打者との心理戦が実に巧妙だったのである。１９９５年の日本シリーズでイチローと対戦したときも、イチローにまともな打撃をさせなかったことが優勝できた一因の一つとされていた。あまり実績のなかったヤクルト投手陣が勝ち星を重ねていったのは古田の「間」による好リードに支えられていたからだと思えた。

私がドンコと格闘していた頃、前野氏はリュックに腰を下ろして休んでいたはずだ。前野氏に伺うと、ドンコがパタパタッと来だした時点で、明け方のアブラコに照準を合わせて体力を温存したというのだ。この「間」が実は大事なのではなかろうか。ドンコの食いが立っているときには、焦らず「間」を置いて、「アブラコ」の食いが立つときまでにその精神力を研ぎ澄ましていたのだ。私がアブラコをものにした時に今が潮時だとアブラコとの「間」合いを詰めていったのだ。

人「間」は、自然の中で自然とともに生きてきた。一時として同じ状態をとどめない自然というものに対して、その流れというものを大事にしてきたのである。農作業を営む上でも、苗を植える、水をやる、収穫するというタイミングが非常に大事であった。「釣り」

にしても釣りに出掛けるときの天気や潮を見極めるタイミングが重要なのは理解出来るであろう。嵐の中、怒濤の海に向かって竿を振るのではなく、その波が治まるまで待たなくてはいけない。「待つ」というのは人間にとって辛く苦しい時だが、自分ではどうすることもできないからだ。日照りが続けば「雨よ降れ」と農民は祈るし、時化ばかりが続いていれば「晴れてくれ」と釣り人は天を仰ぐ。人と人の「間」、空と空の「間」、時と時の「間」。人「間」が、空と海と大地の「間」で、時という「間」を上手くコントロールして付き合っていく必要があるのではないだろうか。

審査は東静内漁港で実施した。優勝は、三石川河口に入った金井氏だった。２名の先客が入っていたが、彼は遠投で次々と大物カジカをものにし、明け方には嫁となるクロガシラを引き抜いたのだ。６月に我が会の大会に参加してから実に５ヶ月ぶりとなる釣行だったが、彼にとってのこの「間」は、釣りに対する感を鈍らせるどころか鋭く研ぎ澄まされたものにしたのだ。

身長優勝は鳧舞崖下に一人で入った堀内氏だった。随分昔に入釣したことのあるということだったが、彼も暗い内から大物カジカを次々とものにし、明けてから身長賞となる４８．７㎝の見事な魚体のアブラコを抜きあげたのだった。年齢という「間」を感じさせない彼の釣りに対する姿勢は、我々の手本とするべきものがあるだろう。準優勝は潮時までの「間」を大事にした前野氏だった。私は、彼との「間」合いを詰められずに結局３位に終わってしまった。

さて、さて、年間優勝の行方である。最後の最後まで仲俣、前野、堀内がデットヒートを繰り返していた今年の大会だったが、かろうじて私が年間優勝をいただくことになった。釣遊会としても５０㎝を超える大物が数多く上がりなかなか充実した１年となった。

左から優勝：金井泰樹、身長優勝：堀内正博、準優勝：前野達志

優勝した金井氏の魚。どうなっているのだ？

自宅に戻ると、バタバタと我が孫が玄関先まで出迎えてくれて「じーじぃ、ゆうしょうした？」と聞いてきた。「今回は優勝しなかったが、年間チャンピオンだ。」「うわーすごいね。どんなさかなかみた～い。」とバッカンを置いた地下に下りていこうとする。普段は地下室が雑多な釣り道具で危険なために入らせないようにしているが、今日はいいだろう。煙草とコマセの入り交じった悪臭の中でアブラコを持たせてデジカメで写した。カジカにも触らせようとしたが「ゴジラのあたまみたいだ」と気持ち悪がって手を出そうとはしなかった。アブラコはフライになった。カジカはザンギと荒汁になった。孫がその魚を食べようとすると、娘が「骨はじーじぃにとってもらってね。」ということになる。孫が美味しそうにアブラコのフライを食べた。普段は口の中で骨を選り分けて吐き出す孫だが、この時は違った。骨が孫の喉に刺さったのだ。じーじぃが魚の骨を取り除くと絶対安心だという孫の思い込みもあったようだ。いつもより丁寧に取り除いたつもりだったのだが・・・。娘も女房も心配して「病院に連れて行って診てもらった方がいいかもしれないね」と大袈裟に宣う。口の中を覗き込んでも突き刺さった骨が見えない。私は「そんなのご飯と一緒に飲み込んでしまえばいいんだ」とは言ってはみたものの、気持ちの上ではウロウロしてしまって落ち着かなくなってしまう。孫はしばらく痛がっていたがなんとか自然に骨がとれたようだった。私もほっと胸をなぜ下ろした。

女房が「今年の釣りはもう終わりですか？」と聞いてきた。そして、「魚の脂などで汚れが落ちない下着類は捨てますからね。」と追い打ちを掛けた。そんな時、札幌竿道会の菅原

信幸氏から連絡が入った。札幌忘釣会大会が１２月第１日曜日、噴火湾の山越～石倉で開催されるので参加しませんかというのである。「下着の始末などどうにでもしてくれ。飛ぶ鳥跡を濁さずとあるぞ、帰りは温泉付きのようだから綺麗な姿で帰還してやる。」「あんた、いつまで飛んでいるつもり？跡を濁さずと言うのはもう戻ってこないということなのよ。そんな自信あるの？」「馬鹿言え。零戦で玉砕なんてのはまっぴらご免だ。不死鳥のように蘇ってきてやる。」なんだか話に付き合うのも面倒になってきたなと思っていると、孫がすかさずいったねぇ。「じーじぃ。ウルトラマンにへんしんして、たたかってきてぇー。エネルギーがゼロになりそうだったら、むねにあかいランプがついて、ピー、ピー、ピーとけいこくおんがなるからきをつけてね」ワッハッハ。孫の印籠にはかなわないと一件落着。さてさて、今年最後になるだろうウルトラマンに変身した戦いでは、アブラコ星人とカジカキングをスペシウム光線でやっつけて孫のもとに凱旋するのだ。シュワッチ！

台所で魚を写してもらっていると、孫がちゃっかりと入り込んできていた。